

## 「嫡母」と「生母」――明代の皇后・皇太後の歴史的位置――

前 田 尚 美

### はじめに

中国歴代王朝において、皇帝の妻である皇后は必ず存在し、子が幼くて即位した場合は垂簾聽政を行うなど、時に大きな影響を与えてきた。

皇帝が始めて登場する秦代では、皇后についての記載がないが、皇后が間違いなく存在したとわかっている漢代の研究では、谷口やすよ氏と渡辺義浩氏のものがある。それによると皇后の権威は皇帝の嫡妻であることに由来し、いわば嫡妻権をもって権力を握っている<sup>①</sup>。

皇后の権威は、皇帝と一体のものとして次第に増していく。しかし皇后は皇帝の妻であるが、次の皇帝の生母とは限らない場合がある。そのとき新皇帝は嫡母である先代皇后と、生母である先代庶妃の二人の母を持つことになる。彼女たちに対する扱いは、後漢の早い段階で生母に皇后を死後追贈する動きが見られる。しかしそれは皇帝と一体のものとされる皇后の優越を妾が破るものであり、また皇后の量産は権威の低下を招くことになった。

こうして嫡妻であることによって持っていた皇后の権威は、次第に低下してゆく。一方で、皇帝は嫡母と生母の二人

の母のうち、生母の地位上昇につとめてゆく。この傾向はその後も続き、ついには祖廟である太廟への祭祀に、本来であれば祀られないはずの生母を祀ろうとする動きが、唐・宋にかけて出現するのである。

ではこうした流れのなかで、明代の皇后・皇太后はどのような影響を受けたのだろうか。明代においても、皇帝不在などの皇位継承問題が生じた時は皇太后が対処しているが、本稿ではその皇太后の權威が、漢代からの流れのなかで、どのような位置づけができるのか考察してみたい。

## 一 皇后の起源と変遷

そもそも皇后とは、皇帝の正妻を指す用語である。つまり、皇帝がいて初めて登場した地位といえる。

ところが、初めて皇帝を称した秦の始皇帝の皇后について、『史記』には記載がない。その存在の可能性を示すものとしては、『漢書』の「漢が興り、秦の称号に困り、帝母を皇太后と称し、祖母を太皇太后と称し、妻を皇后と称し、妾は皆夫人と称す」という記述のみである。<sup>(2)</sup>

秦に皇后がいたかどうかはともかく、秦の制度にならったという漢はどうだろうか。

漢の皇后について、やはり『史記』は非常に記述が少なく、また高祖皇后呂氏を「帝后」「正后」と表記しており、皇后という言葉は恵帝皇后張氏から使用されている。このようにあいまいな点もあるが、少なくとも漢代から皇后が間違いなく存在していたと言える。

漢代の皇后についての研究は、谷口やすよ氏や渡辺義浩氏のものがある。それによると漢代の皇后は皇帝とともに宗廟に奉じ、天下の母として君臨する存在とされる。「天子と后は、日と月、陰と陽のように」皇后は皇帝の嫡妻であることにより、皇帝と一体とみなされた。<sup>(3)</sup> こうした思想は前漢初期に成立していたが、前漢初期には立后に関する儀礼な

どが少なく、皇后の権威が明確に認識されるのは、後宮が本格的に組織される武帝時代後半とされる。<sup>(5)</sup>

ともかく、皇后の権威は増していき、前漢末には「皇后の尊は天子にひとしい」とされ、皇后の尊厳が皇帝と同等となる。<sup>(6)</sup> 後漢でもそれは続き「皇后の尊は朕と同体、宗廟を承け、天下に母たり」とあるように、皇帝と皇后は同尊であり、同体であった。<sup>(7)</sup>

こうしたなかで、しばしば問題となったのは皇后と皇帝生母が異なった場合の、後者への尊号である。「母は子を以て尊し」は、皇后の優越を妾が破るものであり、皇帝と一体と見なされる皇后と、対立する存在となるものであった。

前漢では皇后の権威が増していく過程から、宣帝以降は皇太后を先帝皇后が称することが慣例となり、後漢でもすべての皇太后は先帝皇后であった。<sup>(8)</sup> しかしその一方で、和帝が亡くなった生母へ皇后追贈を行っており、さらに桓帝になると、生母の生前に皇后号が贈られる動きも見られた。皇后号の乱発は皇后権威の相対的低下であり、子の皇帝の権威に屈した形とも言える。<sup>(9)</sup>

生母を重んじようとする皇帝の行動は、祖廟である太廟の祭祀にも現れてくる。本来であれば一帝一后が原則であり、生前皇后であった者（嫡妻）が祀られ、生母は別に廟が立てられるのが通常であった。しかし、これも唐の玄宗が生母を太廟に配した例を受け、北宋では皇后と生母の双方を太廟に祀るようになってゆくのである。<sup>(10)</sup>

皇后・皇太后号や太廟について、はなはだ簡単ながら流れをまとめたが、少なくとも漢代から皇后は存在し皇帝の妻、つまり嫡妻であることによって尊ばれていた。しかし次第に皇帝と血縁的関係のある生母が、皇帝によって皇后と同様の待遇を与えられてゆく。これが漢から唐、そして宋にかけての動きと言えよう。

ではこの流れ・影響を、明代の皇后や皇太后はどのように受けたのだろうか。

## 二 明代の皇后・皇太後の分類と差異

### 1 皇太後の分類

中国歴代王朝は規模の大小はあるものの、後宮に皇后を筆頭とした多くの妃嬪を置いている。結果として多くの子女を持ち、そこから後継者となる皇太子が選ばれ、皇帝となるわけだが、明代ではこの皇位継承について規定がある。初代皇帝の洪武帝が制定した明皇室の家訓である『皇明祖訓』では「嫡母所生の者を立てるべきで、庶母所生の者は年長であっても即位してはならない」としている<sup>1)</sup>。長幼に関わりなく皇后所生、つまり嫡子が皇帝となると定めたものであり、嫡子優先主義という言い方ができよう。

しかし嫡子が皇太子、ひいては皇帝になるのは、むしろ当然である。それでも洪武帝があえて嫡子優先を明言したのは、皇位継承問題が王朝を弱める原因となってきた点を鑑みてのことであろう。一方で、嫡子のみでの王朝存続が難しいことも、また自明である。そのため『皇明祖訓』も、嫡子が望ましいとしているのみであり、嫡子がいなければ庶子が後継者となるのに差し障りはないと言える。

そして明代も、歴代王朝と同じく嫡子のみの継承とはいかず、むしろ庶子が皇帝になるほうが多い状態となる。つまり明代の皇后には皇太子を生んだ者と、生まなかつた者がおり、特に後者は皇帝生母が他にいるため、皇太后という地位に変化をもたらすことになる。

そこで、明代の皇后・皇太后について嫡母・生母という点で整理してみたい。なお血縁関係及び皇后・皇太后の在位期間については、後添の家系図と明代皇后・皇太后表を参照されたい。

## ①「聖母」

皇帝生母は通常、聖母と称される。

明代は洪武帝が定めた嫡子優先を一代通じて継承しており、もっとも好ましい状態は皇后であり皇太子（次の皇帝）の生母という存在である。ここではこの例を「聖母」と表記する。

明代で「聖母」の例は、洪武帝皇后（永楽帝生母）馬氏、永楽帝皇后（洪熙帝生母）徐氏、洪熙帝皇后（宣徳帝生母）張氏、宣徳帝皇后（英宗生母）孫氏、そして弘治帝皇后（正徳帝生母）張氏の五名が挙げられる。

しかしこのなかで、皇太子妃から皇后となり、生んだ皇子が皇帝になるという、スタンダードな段階を経た「聖母」は非常に少ない。

まず、洪武帝皇后馬氏は永楽帝生母ではない可能性が高いことが指摘されている。

永楽帝皇后徐氏と洪熙帝皇后張氏は、もともと燕王妃・燕王世子妃、つまり皇太子妃から皇后になったわけではない。またそれぞれ子である洪熙帝・宣徳帝を生んだのも、皇后になる前であった。

さらに宣徳帝皇后孫氏は、子の英宗を生んだことで皇后になった人物であるのみならず、『明史』では英宗生母ではないとされている。<sup>(12)</sup> 実は明代前半は嫡子優先という原則がありながら、皇位継承が不安定であった。そこで庶長子を嫡子化するべく、生母を皇后としたという事情から「聖母」に含めた。

以上のように、厳密な意味で明代の「聖母」は、弘治帝皇后張氏一人のみしか該当しない。また広義に解釈しても、明代十五人の皇帝のなかで五例のみ、それも明代前半に集中しており、後期には一切登場しない。つまり、嫡子優先を原則としながらも明代の皇帝は、特に後半になると、すべて庶子からの即位なのである。

## ②「嫡母」「生母」

明代後期以降、皇后所出の皇帝は存在しない。つまり皇帝の多くは庶長子であり、即位した時に先帝皇后と先帝庶妃（生母）の二人の母を持つことになる。ここでは前者を「嫡母」、後者を「生母」と表記する。

明代では「嫡母」「生母」の両者が、新皇帝即位後に皇太后として尊ばれるが、このように二人の皇太后を初めて並立させたのは、景泰帝である。

彼は異母兄の英宗が親征の途上、土木の変でオイラトに捕らえられたため、緊急避難的に即位した。そのため、英宗の「聖母」ですでに皇太后になっていた孫氏に尊号を贈って上聖皇太后とし、宣德帝賢妃の「生母」呉氏を皇太后とした。<sup>13</sup>

ただ景泰帝は、奪門の変で復辟した英宗によって王に戻されて逝去した。それに合わせ「生母」呉氏も、皇太后から宣德帝賢妃に戻されているため、呉氏は「生母」としては例外的な存在と言える。しかし、その後の皇帝は皇太后が常に二人存在する、つまり「生母」がいることが常態化する点を考えると、その先駆的な存在とも言えよう。

こうした例は、成化帝期に「嫡母」（英宗皇后）錢氏と「生母」（英宗貴妃）周氏、万曆帝期に「嫡母」（隆慶帝皇后）陳氏と「生母」（隆慶帝貴妃）李氏である。「嫡母」はともかく「生母」は子の即位前に死去している場合が多く、「嫡母」「生母」が並び立つ例は、この二例のみである。

## ③太皇太后

明代においては皇帝がしばしば早くに崩御し、皇太后の上に太皇太后、皇帝の祖母がいることもあった。

太皇太后となった人物は、「聖母」の洪熙帝皇后張氏、「生母」の英宗皇貴妃周氏、「嫡母」の成化帝皇后王氏の三名

が挙げられる。このように「聖母」「嫡母」「生母」、いずれの皇太后であっても、新皇帝の祖母として尊ばれた様子が見て取れる。

また明代で初めて太皇太后となった洪熙帝皇后張氏は、幼かった英宗の即位に尽力するなど、「聖母」の孫氏がいたにもかかわらず、彼女に優越する形で行動している<sup>14</sup>。

#### ④その他

「嫡母」「生母」は、いずれも皇太后・太皇太后となっている。これは両者が広義に、皇太后は皇帝の母、太皇太后は皇帝の祖母である点に求められるであろう。しかし後継者となる皇子がおらず、傍系からの皇帝を迎えるとなった場合、誰を母や祖母とするかは、やはり問題となるものである。

明代でそうした例に当たるのが、嘉靖帝である。彼は即位後まもなく大礼の議を引き起こした。嘉靖帝が亡父を皇帝として扱うよう求めたことがその発端となり、こうした要望は生母にも向けられた。嘉靖帝の即位当時、生母蔣氏と祖母（成化帝貴妃）邵氏が存命であったが、大礼の議のなかでまず祖母を皇太后、後に生母を「聖母」とした。

これは嘉靖帝が自らの皇位継承の正当化の目的がある一方で、次第に皇帝として力をつけ、当初の目的を達成していく嘉靖帝の皇帝権力強化の過程を表すものでもあった<sup>15</sup>。

#### ⑤死後追贈

これまで、生前に皇后・皇太后になった人物を取り上げたが、生母であるが子の即位以前に逝去し、死後に号を贈られる例も存在する。

明代で初めて死後追贈が行われたのは、弘治帝生母紀氏である。亡くなった当時、成化帝淑妃であったが、子の弘治帝即位により皇后を贈られている。<sup>16</sup>一方で、同じく隆慶帝生母杜氏も嘉靖帝康妃であったが、こちらは皇后ではなく皇太后が追贈された。<sup>17</sup>どちらも皇帝生母であり、死後に号を追贈されていることが共通しているが、前者は皇后で後者が皇太后と異なっている。

実は皇太后を初めて追贈された例は、嘉靖帝の祖母の成化帝貴妃邵氏である。彼女は孫の即位で皇太后となったことから「生母」に分類できるが、皇帝の祖母である以上、本来であれば皇太后が贈られるはずである。皇太后が贈られた理由としては、当時傍系から即位した嘉靖帝は、弘治帝皇后張氏を聖母として尊ばざるを得ず、皇太后である張氏を上回ることになる太皇太后の地位を、祖母に贈ることができなかったと考えられる。

しかしこれを画期として、その後「生母」は死後追贈も含めて、すべて皇太后号を与えられている。

他に廃后となった人物にも、死後追贈されている例がある。宣德帝皇后胡氏がそれであるが、廃された理由は跡継ぎとなる皇子がなかったためであり、そのため後年批判を受けている。こうした背景から、次の英宗によって改めて皇后号が贈られている。<sup>18</sup>

以上をまとめると、明代で皇太后は宣徳年間に、太皇太后は次の正統年間に始めて登場し、更に続く景泰年間には「生母」とそうではない皇太后が初めて存在するようになる。それ以降の皇帝には、太皇太后を含む二人以上の皇太后がいることが多い。

成化・万暦年間には「嫡母」と「生母」、弘治年間には「生母」太皇太后と「嫡母」、正徳年間には「嫡母」太皇太后と「聖母」といったように、「聖母」「嫡母」「生母」の組み合わせは一応ではない。だが、いずれであっても皇太后、



ひいては太皇太后になり得たと言える。

漢の皇太后は嫡妻であることから尊ばれ、皇位継承にも大きな発言権をもった。時代は下って明代では、皇位継承には皇太后が決定を下しているものの、こうした問題に関わった皇太后はすべて「聖母」であり、比較するのは難しい。だが「聖母」「嫡母」「生母」のいずれであっても、等しく皇帝の母として皇太后となる様子は、生母の地位の向上であり、生母を皇后として扱おうとする唐・宋の流れを組むものと言える。

しかしここで疑問が生じる。「聖母」「嫡母」は皇后経験者であるため、皇太后になるのは当然としても、「生母」はもともと妃嬪の一人である。妃嬪と皇后との間には歴然たる差があり、同様の扱いなどされるはずがない。それが生んだ子が即位すると、一足飛びに皇后であった「嫡母」と、同格の扱いをされるものだろうか。

## 2 「聖母」「嫡母」「生母」の違い

皇后であった「聖母」「嫡母」、妃嬪であった「生母」、同じく皇太后となるが、まずそもそも、皇后と妃嬪にどのような違いがあったのか。

『明史』輿服志を見ると皇后とその他の妃では、身分を誰の目にも明らかにするものとして、乗り物・衣服に明確な差が設けられている。特徴的なものを挙げると、冊封の際に授けられる冊は、皇后が金冊であるに對し、妃は鍍金銀冊である。また同時に与えられる印も、皇后は「皇后之宝」であるに對し、妃には「皇妃之印」となっている。<sup>(21)</sup>ただ宣徳年間より後は、貴妃にも宝が与えられるようになるが、これは宣徳帝が「聖母」張氏に願ひ出て、特に作られたものである。<sup>(22)</sup>後に踏襲されるとはいえ、当時としては非常な特例であり、皇后と妃が同列の扱いというのはありえないことであつた。

皇后と妃嬪には大きな隔たりがある。しかし不思議なことに皇太后・太皇太后の待遇は、「皇后と同じ」とするのみに留ま<sup>(23)</sup>っている。少なくとも規定の上「嫡母」はともかく、「生母」も皇后と同じ待遇となり、妃であった「生母」は、皇后であった「嫡母」と同格となってしまうのである。

しかし、本当に皇后とすべてが同じだったのだろうか。

まず明代で初めての皇太后、洪熙帝皇后で宣德帝の「聖母」張氏の例から見てみたい。

張氏の皇太后冊封の際、礼部が出した儀注は「皇太后の上尊、及び皇后・皇妃の冊立の儀注」とある<sup>(24)</sup>。目を引くのは皇后と他の妃に対しては、冊立という文言が使用されているにも関わらず、皇太后には使用されていない点である。実は規定についても皇后冊封はあるが、皇太后のものは見当たらない<sup>(25)</sup>。

まるで皇太后が冊封されていないかのようなのであるが、内容を見ると「冊宝を奉り、母后張氏を尊んで皇太后とする」とされている<sup>(26)</sup>。通常冊封儀礼は、冊と印が与えられるものである点から、冊封はなされていると見るべきであろう。張氏は孫の英宗即位とともに太皇太后となるが、そのときも同様である<sup>(27)</sup>。

皇后や妃には使われる冊封という言葉が、皇太后・太皇太后には使われていない理由としては、皇太后に「冊宝を上奉」という姿勢に求められる。誰も取って代わることができない至高の存在の皇帝が、宣德帝の場合「聖母」張氏を「尊んで皇太后」にしている。そのため儀礼の中で、皇帝は「北に向かつて立つ」のである。本来皇帝は南面、下座である南を向いているはずが、皇太后に尊号を奉る際は北面、つまり下座に立つのである<sup>(28)</sup>。

皇后や妃に対して行われた冊封は、広義では君臣の間柄と規定できる。しかし皇太后に対して皇帝が「上尊」「北面」するのは、母である皇太后に対して、本来あるべき君臣関係から離れ、母子関係という非常に個人的な立場を取っている証明であろう。皇太后(母)が皇后(妻)よりも優先・優越する理由もここにあると言える。

さて、明代初の皇太后張氏は「聖母」であるが、皇后であつた「嫡母」と妃嬪であつた「生母」はどうなるのだろうか。

初めて「生母」を皇太后とした景泰帝の例を見てみると、「謹んで皇母皇太后を尊んで上聖皇太后とし、生母を皇太后とする」としている。<sup>(29)</sup> ここでいう皇母皇太后とは、宣德帝皇后で英宗生母の孫氏、「聖母」である。先述の通り、当時英宗は土木の変でオイラトに捕らわれており、即位した景泰帝は孫氏に尊号を贈り尊重しつつも、宣德帝賢妃であつた母呉氏を皇太后、つまり後付けながらも宣德帝皇后とすることで自らを嫡子化し、皇位継承の正当化を図つたと考えられる。

そこまでしなければならぬほど、景泰帝はイレギュラーな即位であり、後に帝位を追われている。そのため、正式に「嫡母」「生母」の二人が並び立つたと言えるのは、成化帝の時であろう。

成化帝は即位に際し、二人の皇太后を「母后皇后を尊んで慈懿皇太后、母妃皇貴妃を皇太后とする」としている。<sup>(30)</sup> ここでいう母后皇后とは「嫡母」の英宗皇后錢氏、母妃が「生母」英宗皇貴妃周氏である。このように「嫡母」「生母」を分け、景泰帝の時と同様に「嫡母」には尊号を奉り、「生母」を尊号のない単なる皇太后としてゐることがわかる。

こうした形式は受け継がれ、続く弘治帝の時にも「尊んで頭号を奉り、皇祖母を聖慈仁寿皇太后といい、母后を皇太后という」としている。<sup>(31)</sup> ここでいう皇祖母は先述の「生母」成化帝生母周氏、母后は「嫡母」成化帝皇后王氏である。<sup>(32)</sup> 注目されるのは皇太后時代には与えられなかつた尊号が、太皇太后に贈られている点である。

同様に太皇太后がいた次の正徳帝の時は、「謹んで冊宝を奉り、聖祖母の尊号を太皇太后といい、聖母の尊号を皇太后という」としている。<sup>(33)</sup> この聖祖母は「嫡母」成化帝皇后王氏、そして皇太后は弘治帝皇后の「聖母」張氏である。ここでは太皇太后に尊号が見られないが、正徳五年に贈られている。<sup>(34)</sup>

まとめると成化帝は「嫡母」と「生母」、弘治帝には「生母」太皇太后と「嫡母」皇太后、正徳帝には「嫡母」太皇太后と「聖母」がいた。

そのなかで皇太后では、「嫡母」に尊号が贈られている。つまり、もともと皇后であった「嫡母」が「生母」よりも尊ばれ、上位にあつたためと考えられる。それは、生母が皇太后になる際に母妃などと表記され、皇后と区別をつけている点からも窺えよう。それが太皇太后になると、「嫡母」「生母」に関らず尊号が贈られているが、これはより上位にある人に贈るといふ、皇太后と同じ理屈が使われたのではないだろうか。

しかし「聖母」「嫡母」「生母」のいずれにも皇太后が贈られ、皇帝の母として等しく尊ばれている点は、「生母」の地位向上と考えられる。そして万暦年間になると「聖母皇后の尊号を仁聖皇太后、聖母皇貴妃の尊号を慈聖皇太后という」となる。<sup>(36)</sup> 皇太后二人ともに聖母と冠されているが、実際は前者が「嫡母」隆慶帝皇后陳氏、後者が「生母」隆慶帝皇貴妃の李氏である。これは「嫡母」と「生母」の区別をなくするものであり、実際万暦帝は二人の皇太后を分け隔てすることはなかったといふ。<sup>(36)</sup>

万暦帝の後、明代には太皇太后・皇太后が存在しないため、この措置を例外的と言うこともできる。しかし基本的に「嫡母」の上位が動かないものとしても、そのときの事情や皇帝によつて、皇太后や太皇太后の扱いは変化しうるものであったと考えられる。

## 三 皇后・皇太后の死後

## 1 陵墓

漢代以降、皇帝は生母の地位向上につとめてきたが、それはとりもなおさず生母を皇后と同様の待遇に近づけることであった。明代ではこうした流れを受けて、「嫡母」「生母」の区別は残しつつも、どちらも皇太后を名乗るようになったと言える。

しかし、皇后と同じ扱いとは何も生前に限ったものではない。本人の崩御の後に議論となる、陵墓や太廟への祭祀などは、子である皇帝の意思がどうしても絡んでくることになる。

明代においてこうした問題の最初の例は、成化帝の時代である。

成化帝には先述のように、「嫡母」英宗皇后錢氏と「生母」英宗皇貴妃周氏の二名の皇太后がいたが、先に成化四年（一四六八）六月に「嫡母」錢氏が崩御した<sup>(37)</sup>。

錢氏は明代で初めての「嫡母」、つまり子のない皇后であった。これまでの皇后は基本的に「聖母」であり、その後皇帝とともに葬られることに何の問題もなかった。しかし何か危ぶむものがあつたのか、先帝である英宗はわざわざ錢氏崩御の後は、陵墓にともに葬るように遺言している<sup>(38)</sup>。英宗の心配は杞憂ではなく錢氏の死後、「生母」周氏が合葬に難色を示したため、朝廷で論議が起こつたのである<sup>(39)</sup>。周氏の言い分を通そうとする成化帝と、反対する廷臣たちで紛糾するが、最終的には二人の皇太后の両方が陵に葬られることになった<sup>(40)</sup>。

錢氏は英宗皇后、嫡妻である。本来ならば、遺言がなくとも皇帝とともに陵墓に葬られるはずである。この問題の原因は皇帝が生母の要望を通そうとした、つまり皇帝が生母を重んじるために起こつたものと言える。その結果とし

て、一帝一后という古来からの原則が破られたのである。

これを皮きりに明代の皇帝は、以下のように陵墓に二后、多ければ三后とともに葬られることが多くなる。<sup>(1)</sup>

英宗 (裕陵) …「嫡母」錢氏、「生母」周氏

成化帝 (茂陵) …「嫡母」王氏、「生母」(弘治帝生母) 紀氏、「生母」(嘉靖帝祖母) 邵氏

弘治帝 (泰陵) …「聖母」張氏

正徳帝 (康陵) …皇后夏氏<sup>(42)</sup>

嘉靖帝 (永陵) …「嫡母」陳氏、「嫡母」方氏、「生母」杜氏

隆慶帝 (昭陵) …「嫡母」李氏、「嫡母」陳氏、「生母」李氏

万曆帝 (定陵) …「嫡母」王氏、「生母」王氏

泰昌帝 (慶陵) …「嫡母」郭氏、「生母」(天啓帝生母) 王氏、「生母」(崇禎帝生母) 劉氏

天啓帝 (徳陵) …皇后張氏<sup>(43)</sup>

崇禎帝 (思陵) …皇后周氏、貴妃田氏<sup>(44)</sup>

目を引くのは合葬が三后である時、「嫡母」が二人いる場合と「生母」が二人いる場合がある点である。

まず、初めて三后と合葬された成化帝を例に見ていきたい。ここでは「嫡母」はともかく、二人の「生母」がいるのはなぜなのか。

人間関係を整理すると、「嫡母」王氏は成化帝皇后である。二人いる「生母」の前者の紀氏は、成化帝の子である弘

治帝生母、後者は嘉靖帝の祖母邵氏である。このうち邵氏は先述のように、嘉靖帝が自らを正当化する一環として皇太后となったが、これは皇帝による祖母を成化帝皇后としたという言い方もできる。「嫡母」「生母」は皇帝の母として、ともに皇帝の陵墓に合葬されることが、慣例となったと考えられる。同様に、子である天啓帝・崇禎帝の兄弟が相次いで帝位を継いだ泰昌帝もまた、「嫡母」とともにやはり「生母」が二人、合葬されている。

では同じ三后であっても「嫡母」が二人合葬されている場合はどうなのだろうか。

まず嘉靖帝には、実は皇后となった人物が陳氏・張氏・方氏の三人がいる。最初の皇后陳氏は妊娠中に崩御、続いて皇后となった張氏は廃され、三番目の皇后方氏も嘉靖帝よりも先に崩御している。<sup>(45)</sup>このなかで廃された張氏を除いて、最初に合葬されたのは方氏である。それが次の隆慶帝が即位すると、陳氏を嘉靖帝の元配とし、さらに杜氏を「生母」として、合葬することになったのである。<sup>(46)</sup>

続く隆慶帝の場合は、即位前の裕王時代に妃李氏がいたが、即位前に死去している。彼女の後に裕王妃となり、皇后となったのが「嫡母」陳氏である。隆慶帝即位前に亡くなった李氏は、皇后号が贈られ、万暦帝の時に改めて合葬された。<sup>(47)</sup>これは嘉靖帝の時における陳氏と同じく、元配であるという理由が適応されたと考えられるのである。

いずれにせよ陵墓への合葬は、「聖母」はともかくとして、「嫡母」や元配といった、嫡妻を重んじている一方で、「生母」のために一帝一后の原則を破ることになったのである。「生母」が皇后やそれに相当する正室とともに、陵に合葬されることは「生母」が「嫡母」とともに皇帝の母として、同列の待遇となった表れであろう。

さて、合葬に当初はともかく、「嫡母」「生母」の区別はない。では、これもまた一帝一后が原則である太廟の祭祀では、どのようなのだろうか。

## 2 太廟と奉先殿

漢代では皇后は皇帝とともに宗廟に仕えるという理念から、太廟で皇帝に配されるのは生母よりも嫡母であった。しかしそれが三国時代の魏になると、生母のために別に廟を設けるようになる。これは、太廟には嫡母が優先することが揺らいでいない証拠であるが、別廟に生母を祭る制度はその後、南朝にも引き継がれている。

唐代では玄宗の時、太廟に嫡母と生母の二人を配した例があるが、これは例外であり唐においても嫡母優先、そして一帝一后の原則が守られ続けている。こうした原則が崩れるのは北宋である。唐の玄宗の例をもって、一帝二后・三后と増えていき、ついには嫡母も生母も太廟に祀られ、別廟も消えるのである。

こうした傾向は皇后を称える文言にも現れており、漢から唐までは「宗廟を承ける」といった表現が用いられていたのに対し、宋になると「天下に母儀たり」など、皇帝の母である面が強調されている。皇帝の嫡妻よりも皇帝の生母、つまり皇帝との血縁的つながりがより重視されることで、生母の地位は上昇したのである。<sup>(48)</sup>

ではこの流れを受けて、明代ではどうなったのだろうか。

明代では太廟のほか、内廷に奉先殿が設けられた。<sup>(49)</sup> 先述のように明代の初めは「聖母」しかいなかったため、一帝一后という古来よりの原則の通りであった。しかし「嫡母」「生母」が登場することで、やはり変化が現れる。

最初にこの問題に直面したのは、弘治帝である。「生母」紀氏は即位当時、すでに亡くなっていたが、死去当時は淑妃であったところを皇后号を贈り、成化帝と合葬された。しかしやはり太廟・奉先殿に祀ることはかなわず、別廟として奉慈殿が設けられたのである。<sup>(50)</sup> この奉慈殿にはその後、成化帝生母の周氏、嘉靖帝祖母の邵氏が祀られた。

奉慈殿は嘉靖年間に廃止されるが別廟はなくならず、嘉靖帝皇后方氏が弘孝殿に、隆慶帝生母杜氏が神霄殿に、万曆帝生母李氏が崇先殿に祀られた。<sup>(51)</sup> 別廟はまさしく「生母」を祀るものであり、逆に言えば「生母」はこのような形でし



か祀ることができなかったのである。

かわって太廟・奉先殿には、「聖母」「嫡母」が祀られている。そのなかで「嫡母」については、皇后になっていない元配が、皇后経験者である後妻よりが優先されている。彼女たちの特徴は皇后であることよりも、一時的なりとも後に皇帝となる人物の妻であった点である。つまりこれは、皇帝の嫡妻という立場が重要視されているのであり、祖廟を皇帝とともに奉ずるとして權威を得てきた、漢代に近い対応とも言える。太廟への祭祀は皇帝生母よりも、皇帝の妻という立場が優先された理由はそこにあると考えられる。

万暦年間には奉先殿に別殿を設けられ、そちらに「生母」が祀られるようになり、別廟はなくなることになる。<sup>(52)</sup> ついに奉先殿に「生母」が入ったわけであるが、それでもあくまで別室であり、皇后や元配と同列とはいかなかったと言える。

宋では生母も太廟に祀られていたが、別廟への祭祀が明代で復活した。明代では「生母」は、皇帝との血縁的つながりから「嫡母」と変わらぬ待遇を得たと言えよう。その一方で、元配を含む「嫡母」を皇帝の妻として尊重するという、原点回帰とも言える対応も見せている。生母への待遇を向上させてきた明代であるが、少なくとも太廟・奉先殿の祭祀、つまり祖廟にかかわる事項で「生母」を皇后と同列にすることはできなかったのである。

### おわりに

皇后は当初は皇帝の妻として權威を伸ばした。しかし皇帝が次第に生母を重んじるようになり、唐から宋にかけては皇帝の母として、生母の地位を上昇させていった。本稿ではその流れが明代にどのような影響したのか、検討を加えた。明代は嫡子優先主義の皇位継承が定められている。当初はこの原則に従い、皇后は次の皇帝の生母でもある「聖母」

であった。しかし明代後半は皇后所生の皇帝はおらず、多くが先帝皇后の「嫡母」と、産みの母である「生母」の二人の母を持つことになった。

漢から宋に至る流れは明代にもあり、「生母」は「嫡母」とともに皇太后となり、ほぼ同様の扱いを受けるまでになる。これは、皇帝の嫡妻として權威を持っていた漢代とは異なり、「嫡母」「生母」ともに皇帝の母・祖母として区別をなくし、結果として生母の待遇を良くしていると言える。つまりは生母を先帝皇后と同列とする行為とも言えるが、その根拠は皇帝の妻から、皇帝の母に変化しているのである。

しかしそれでも「嫡母」と「生母」では、前者が上位に立つ点は動いていない。また陵墓ではともかく、太廟や奉先殿といった祖廟の祭祀においては、「生母」は別廟に祀られるように、まったく入りこめない。一方で祀られる「嫡母」は、皇后を経験していない元配も含まれており、その場合は皇后であった後妻を退けて祀られている。つまり、ここでは皇帝の妻という点が重要視されていると言える。

明代は皇帝とともに祖廟を奉じるという、漢代の皇后・皇太后の權威の根拠になったものを残しつつ、生母を皇后経験者と同列に扱おうとする宋代までの流れを組んでいると言える。

こうした皇后・皇太后にかかわる問題は、皇帝がいる以上、どうしても起こってくるものである。本稿では明代のみを取り上げているが、この後の清代ではどのようなものだろうか。そうした大きな視点での検討は今後の課題である。

## 注

(1) 谷口やすよ「漢代の皇后権」『史学雑誌』八十七—一一号、一九七八年。

渡辺義浩『後漢国家の支配と儒教』雄山閣出版、一九九六年。

一方、岡安勇氏（「漢魏時代の皇太后」『法政史学』三十五、一九八三年）は皇太后の権力は、皇帝の母という点に基づくとしている。

(2) 『漢書』卷九十七上、外戚伝上。

「漢興、因秦之称号、帝母称皇太后、祖母称太皇太后、適称皇后、妾皆称夫人」。

(3) 『礼記』昏義。「天子之與后、日之與月、陰之與陽、相須而後成者也」。

(4) 谷口やすよ「漢代の皇后権」『史学雑誌』八十七—一一号、一九七八年。

(5) 保科季子「天子の好迷——漢代の儒教的皇后論」『東洋史研究』六十一—二、二〇〇二年。

(6) 『漢書』卷九十九上、王莽伝「皇后之尊、侔於天子」。

(7) 『後漢書』卷十上、皇后紀。「皇后之尊、与朕同体、承宗廟、母天下」。

(8) 注(5)に同じ。

(9) 注(5)に同じ。

(10) 新城理恵「唐宋期の皇后・皇太后——太廟制度と皇后——」『中華世界の歴史的展開』汲古書院、二〇〇二年。

(11) 『皇明祖訓』内令。

凡朝廷無皇子、必兄終弟及。湏立嫡母所生者、庶母所生雖長不得立。若姦臣棄嫡立庶、庶者必当分守勿動。遣信報嫡之当立者、務以嫡臨君位朝廷、即斬姦臣。

(12) 『明史』卷百十三、后妃伝一、孝恭皇后。

(13) 『皇明詔令』卷十二、景皇帝、正統十四年十二月十日。同様の内容として『明英宗実録』卷百八十六、正統十四年十二月丙辰。

(14) 拙稿「明朝の皇位継承問題と皇太后―誠孝皇后張氏を例に―」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第九号、二〇一〇年。

(15) 拙稿「大礼の議における慈寿皇太后の懿旨の意味」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第十号、二〇一一年。

(16) 『明史』卷百十三、后妃一、孝穆紀太后。

(17) 『明史』卷百十四、后妃二、孝恪杜太后。

(18) 『明史』卷百十三、后妃一、恭讓皇后。

(19) 『明史』卷六十五、輿服一。

(20) 『明史』卷六十六、輿服三。

(21) 『明史』卷六十八、輿服四。

(22) 注(21)に同じ。

(23) 『明史』卷六十四、儀衛「皇后儀仗、洪武元年定……太皇太后・皇太后儀仗與皇后同」。

『明史』卷六十五、輿服一「太皇太后・皇太后輅及安車・行障・座障、制與皇后同」。

皇太后の冠服についての規定は見つからないものの、皇太后も皇后と同じく儀礼に参加していたため、やはり皇后と同じであったものと考えられる。

- (24) 『明宣宗實錄』卷二、洪熙元年六月丙寅。
- (25) 『明史』卷五十四、礼八、冊皇后儀。『明集礼』嘉礼三、冊皇后。
- (26) 『明宣宗實錄』卷三、洪熙元年七月乙亥。「上奉冊宝尊母后張氏為皇太后」。
- (27) 『明英宗實錄』卷二、宣德十年二月戊申。  
上奉冊宝尊聖祖母皇太后為太皇太后。冊文曰……謹上冊宝尊聖祖母皇太后為太皇太后、聖母皇后為皇太后。
- (28) 『明史』卷五十三、礼七、上尊号徽号儀。
- (29) 『皇明詔令』卷十二、景皇帝、正統十四年十二月十日。  
奉天承運皇帝詔曰、……謹上尊皇太后曰上聖皇太后、生母曰皇太后。
- 同様の内容として、『明英宗實錄』卷百八十六、正統十四年十二月丙辰。
- (30) 『明憲宗實錄』卷三、天順八年三月甲寅。「尊母后皇后為慈懿皇太后、母妃皇貴妃為皇太后。」
- (31) 『皇明詔令』卷十七、上兩宮尊号及立中宮詔、成化二十三年十月十日。  
奉天承運皇帝詔曰、……尊上顯号、皇祖母曰聖慈仁寿太皇太后、母后曰皇太后。
- (32) 弘治帝生母紀氏は、すでに薨去。『明史』卷百十三、后妃二、孝穆紀太后。
- (33) 『明武宗實錄』卷四、弘治十八年八月丙辰。  
以上兩宮尊号礼成、……謹奉冊宝、恭上聖祖母尊号曰太皇太后、聖母尊号曰皇太后。
- (34) 『明武宗實錄』卷七十、正德五年十二月甲午。
- (35) 『明神宗實錄』卷三、隆慶六年七月己丑。  
勅諭礼部、……恭上聖母皇后尊号曰仁聖皇太后、聖母皇貴妃尊号曰慈聖皇太后。

- (36) 『明史』卷百十四、后妃二、孝安皇后陳氏。
- (37) 『明憲宗實錄』成化四年六月甲寅。
- (38) 『明史』卷百十三、后妃一、孝莊皇后。「英宗大漸、遺命曰、錢皇后千秋萬歲後、与朕同葬。」
- (39) 『明史』卷百十三、后妃一、孝莊皇后。「成化四年六月、太后崩、周太后不欲后合葬」。
- (40) 注(38)に同じ。
- (41) 『万曆野獲編』卷三、宮闈、帝后耐葬。
- (42) 正德帝皇后夏氏をはじめ、正德帝には子がなかった。
- (43) 天啓帝も皇后張氏に子がなく、妃嬪との間の子も夭折している。
- (44) 崇禎帝の陵墓は、もともと先に亡くなった貴妃田氏の墓であり、崇禎帝と皇后周氏が後になって葬られた。
- (45) 『明史』卷百十四、后妃二、孝潔皇后・廢后張氏・孝烈皇后。
- (46) 注(45)に同じ。
- (47) 『明史』卷百十四、后妃二、孝懿皇后・孝安皇后・孝定李太后。
- (48) 注(5)に同じ。
- (49) 『明史』卷五十二、礼六、奉先殿。
- (50) 『明史』卷五十二、礼六、奉慈殿。
- (51) 注(50)に同じ。
- (52) 『明史』卷百十四、后妃二、孝純劉太后。

●家系図（『明史』后妃伝より）



